

ただその人の徳をとりて

失をとることなかれ

独りでは生きられないのが人間であるから、否応無しに他の人との付き合いはしなければならなくなる。

その場合、その人の短所や悪いところばかりとりあげて問題にすべきではない。悪いところばかりとりあげて問題にしていたのでは、この世の中に手本とすべき人は一人もいなくなってしまうであろう。

ともすれば相手の長所やよいところには眼をつぶって見ないようにし、その短所や欠点ばかり見つけて軽蔑する、誠に貧しきかなその心。

なさけないところである。

それよりもその人の中から長所よいところを見だし、その立派なところに交わるのがよい。そうすれば、自ずと相手の素晴らしさに気付き、自分自身にとつても得るところ、向上するところが多いであろう。

新年を迎え、心新たに一年の計を立てるとき、相手の徳行に触れて、己が貧しき心を反省し、自身の欠点を見直す心構えを持ちたいものである。

そうすれば、今年も一年お互いに心安らかに、誠意を持ったお付き合いが出来るのではなからうか。

新年頭に当たり、一年の希望と自戒を込めて、この言葉を今一度噛み締めていただきたい。

人に接する時の心構えとして『修証義』第四章に、「衆生を見るに、先ず慈愛の心を発し、顧愛の言語を施すなり。……徳あるは讃むべし、徳なきは憐れむべし」とあります。

道元禪師は、人に対しては先ず慈愛の心をもってその徳を称えることをすすめています。また、徳なき行為・言動に対しては、慈しみの念を持つよう諭されています。そして、そのような対応によってお互いに思いやりの気持ちが育ち、慈しみの言葉（愛語）が生まれると説かれています。

坐禪修行に厳しい教えを残された道元禪師ですが、その背景にはこのような仏道に根ざした深い慈愛の心が存在していることを知る事ができます。

ここに示した言葉も、当にそのような慈悲の心を持って人に対すべき事を諭しているのです。

ただその人の

徳をとりて

失をとるなかれ

曹 洞 宗

神奈川県第二宗務所

第五教区 布教部・出版部